

1月第3週の礼拝説教

■日 時：2023年1月15日（日）10：30－11：30 降誕節第4主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「お言葉ですから」

■聖 書：ルカによる福音書5章1～11節（新約 p109）

■讃美歌：57「ガリラヤの風かおる丘で」516「主の招く声が聞こえてくる。」

ルカによる福音書5章1～11節には、「**四人の漁師を弟子にする**」という見出しが付いています。その左下の（括弧）には、同じ様な内容の記事がマタイによる福音書4章18～22節と、マルコによる福音書1章16～20節に記されていることが示されています。それらを読み比べてみますと、マタイによる福音書とマルコによる福音書とは、ほとんど同じ内容であることが分かります。ですから、「なぜ、聖書は同じ話を繰り返し書いているのだろうか」と思われることも多いのです。それは、ある出来事が起こったとき、その場にいた人々がどのようなところに立っていたのかによってその目撃証言が少しずつ違ってくるといように考えていただくとよいと思います。同じ出来事を記す他の福音書と比べて読んでいくと、一見同じ話と思われることも、主イエスの言動を、誰が、どのように受け止め、それを後の世代にどのように伝えていったのかによって、それぞれに異なる意味を持つようになっていったことが見えてくると思います。

本来、福音書はマルコによる福音書が最初に記されました。ですから、この「**四人の漁師を弟子にする**」という記事も、簡単に言えば、マルコによる福音書がオリジナルで、マタイによる福音書とルカによる福音書は、その記事を受け止めながら記しています。マタイによる福音書は、マルコによる福音書の記事をほとんど引用する形になっています。ガリラヤ湖のほとりを歩いておられた主イエスが、湖で網を打っているシモンとその兄弟アンデレをご覧になって、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と一方的に呼びかけたところから、出来事が始まっています。そして、「二人は**すぐに網を捨てて従った。**」とその場面が描かれています。「**すぐに**」という言葉によって、二人の漁師のこれまでの人生を象徴する網を即座に捨て去らせるほどの大きな力がこの出来事に働いている、そして二人は躊躇う間もなく主イエス・キリストに従う者へと大きく向きを変えられた、ということを一言で語りつくしているのです。では、ルカによる福音書独自の視点や主張とはどのようなものなのでしょうか。ルカによる福音書では、「**四人の漁師を弟子にする**」という出来事が起こる前に、直前の4章で、汚れた霊に取りつかれた男のいやしやシモンのしゅうとめをはじめとする多くの病人のいやしがなされ、それを見聞きした数多くの群衆が主イエスの周りに集まってきている様子が記

されています。それは、そのような素晴らしい奇跡を伴った主イエスの力強い宣教がなされているのだから、四人の漁師もおそらく主イエスの評判を伝え聞いていたに違いない、だから近くを通りかかった主イエスから呼びかけられたら、それに応える行動を起こすのは当然のことである、というように、その出来事に説得力を与えようとしています。ルカによる福音書の著者ルカは、そのように、私たち人間の側に立って、誰もが納得できるように丁寧に状況説明をしていると言えます。

私たちはルカによる福音書をご一緒に読んでいますから、5章1節に戻りましょう。主イエスはゲネサレト湖畔に立っておられました。「ゲネサレト湖」は「ガリラヤ湖」とも呼ばれています。すると主イエスのもとに、教えを聞こうとして群衆が押し寄せて来ました。そこで主イエスはシモンの舟に乗り込み、岸から少し漕ぎ出させて、舟の中に腰を下ろし、そこから岸边にいる群衆たちに教え始められたのです。主イエスが舟の中から岸边にいる人々に語るという場面は、マルコ福音書などにも記されており、押し寄せる人々に押しつぶされないように少し距離を取って話すには、丁度よいやり方だったのです。「**神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。**」と記されています。これはとても大事な言葉です。主イエスの語る神の言葉を聞こうとして人々は集まったのです。ここに、ルカによる福音書の著者の独自の視点が示されています。

さて、主イエスは話し終わるとシモンに、「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい**」とわれました。「**わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。**」と語るシモンの言葉からすると、主イエスの言われたことは非常に唐突な常識外れのことだったと言えます。しかし、特に注目しておきたいのは、二人の間の漁に関する話ではありません。シモンが主イエスに対して「先生」と呼び掛けていることです。「**先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう**」と答えています。直前の4章38節、39節を見ますと、シモンは、かつてしゅうとめが高い熱に苦しんでいた時に、主イエスが言葉によって熱を下げて癒してくださったということを体験しているのです。ですから、その場にいる誰よりも主イエスの言葉を神の言葉として聞いてきたのです。その主イエスのお言葉だから、漁は自分の専門分野であるけれども、主イエスがお語りになる神の言葉に聞き従おうとしたのです。それが「**お言葉ですから**」という一言に表れています。

そして、彼らが主イエスのお言葉通りに沖へ漕ぎ出して網を降ろしてみると、「**おびただしい魚がかり、網が破れそうに**」になりました。そこでもう一艘の舟に助けを求めたところ、二

艘の舟に魚がいっぱいになり、その重さで沈みそうになりました。このもう一艘の舟に、ゼベダイの子ヤコブとヨハネが乗っていたものと思われます。プロの漁師である彼らが一晩中苦勞しても何もとれなかったのに、主イエスのお言葉通りにしたところ、二艘の舟が溢れるほどの大漁になったのです。そこで、もう一度注目していただきたい言葉があります。8節の「**これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。**」で、「シモン」という名前が、「シモン・ペトロ」に変わっていることと、主イエスに対する呼びかけが5節では「先生」であったのに、8節では「主よ」になっていることです。そして、ひれ伏したシモンに、主イエスは「**恐れることはない**」と語りかけました。クリスマスの物語の中では、天使がザカリアやマリアや羊飼いたちに対してこの言葉を語りました。この言葉の中にも、著者ルカの信仰が表れています。私たちがまた、主イエスが「**恐れることはない**」と語りかけて下さらなければ、御前に立つことができない罪人なのです。この「恐れることはない」は、「あなたの罪は赦された」という宣言と読むことができます。私たちに對する主イエスのお言葉として正確に受け止めるならば、「**わたしがあなたの罪を全て引き受け、それを背負って十字架にかかって死んだ。それによってあなたの罪は赦された。だから恐れることはない**」ということです。主イエスはこのことのためにこの世に来て下さり、十字架の死への道を歩いて下さったのです。「**恐れることはない**」と語りかけて下さった主イエスは、それに続けて、「**今から後、あなたは人間をとる漁師になる**」と言われました。この主イエスの招きの言葉によって、11節にあるように「**そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。**」という出来事が起こったのです。私たちが、一人ひとりが主イエスから招きの言葉をかけられて、今、ここにいます。その事実によって、私たちは「**お言葉ですから**」とお答えして、主イエスに従ってまいりたいと思います。